

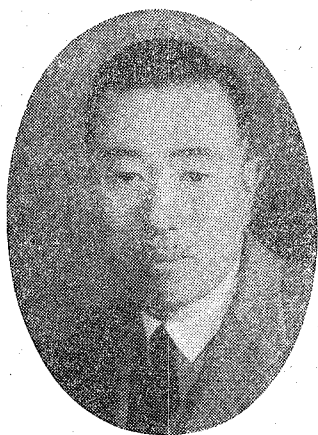
説苑



決戦下の土木戦士(二)

名古屋土木出張所管内を見る

清水生



説苑

松阪から神都山田へ

富 偉大なる國  
永 學者本居宣長  
所 翁の遺跡を一  
長 通り參觀した  
吾々一行は七  
月二十九日午

後一時頃松阪城跡をあとにして有史三千年の建國繪巻物を包容してゐる神靖びた神路……參宮道路に車を走らせて一應視察するとを得たのであるが、舊參宮道路は大體新道計畫と同様であるやうに參宮急行電鐵に沿つて居るがその道路の幅員も三米突位にしか思はれぬ頗る狭少の箇所が所々にあつて全く貨物自動車は勿論、乗用車さへ行き替りか困難のやうなところがある。加ふるに路線は沿道軒並の低い田舎家によつて紆餘曲折が頗る多いのには驚いたのである、これでは全く近代道路の機能をも發揮し得ざる

ことは勿論殊にこの地帯一圓は〇〇の關係上迅速に國道改良の必要があることを感じたのであつた、併乍らこの舊參宮道には昔の「御伊勢様まあり」の面影を偲ばしめる何物かが今尙残つて居るのは頗もしくも思はれたのである、而して今回の改良計畫は松阪市から神都宇治山田市の入口までは殆んど紆曲なしに一直線に建設するやうであるが車上から見ると或る一部は所々であるが既に出来上つて居るやうなところもある、この改良道路は大體幅員は松阪市附近は十五米突其他は山田市入口まで〇〇米のやうであるが路面は松阪市附近ではコンクリート舗装であるか全路を通じては砂利敷道路である、兎も角この新道が完成の曉は産業上の主要道路としては名古屋から桑名四日市津を経て松阪市までであらうが、沿線は相當に發達すると思はれるのである、伊勢の道路を視ても道路工夫と云ふものは却々大切の仕事である、彼等は一人で路線を二三里も受持つて庸々と道路の小破修繕をやつて居り亦風雨でもあればどこかに破壊されたところが無いかと悪天候の中を探し廻る苦勞さは察せらるるのであるが、更に道路建設の土工等に至つては炎熱下に於いて日光を直射に浴びつゝ決斷體制下國道建設の重要性を認識してか一生懸命に働いてゐる現状を見るに及んで勞働の崇高なるを感ずると共に自然頭の下るのを覺ゆるのであつた、全く道路の建設や其他の土木第一線に立つて働いてゐる人々は並大抵の苦勞でないことを痛感したのであつた。

## 大神宮に參拜

新道は神都山田の入口宮川に架設して舊參宮道路の宮川橋をその儘に置いてこれを使ふやうであるがこの橋は鐵橋ではあるが新道の幅員と比較して狭いが資材の困難なる現在に於ては已むを得ないことである、若し夫れが名古屋と松阪の間であつたならばこの狭い橋梁のために交通力は餘程こゝで停滞しないかと思はれるが宇治山田市の入口であるから差ししたることもなからうと思はれた、平井幹事と筆者は熊本參宮國道工事事務所長や松尾技師松川技手等の厚意ある案内で大體參宮舊道路と改良國道を視察することを得たが、かやうにして參宮道路を見つゝ神都宇治山田まで行つた吾々は茲に嚴肅なる氣持ちになつて神宮參拜をしたのである、吾々一行の神宮前に到着した頃から天候は次第に變つて遂に大雨となつたが、寧ろ巨木神木に降り注ぐ聖雨の爲に一層神秘的なるを感じ身は一段と嚴肅になつたのであつた、申すまでもなく内宮は天照皇大御神、外宮は豐受大御神を御祭神として我國最高の御神位にましますのであつて御靈代は八咫鏡である、初め御鏡は宮中に奉安されてゐたが、崇神天皇の御代に大和の笠織邑に遷され次いで諸國に屢々御遷幸のあと、垂仁天皇の御宇に現在の伊勢の五十鈴河畔を永久の御座所として鎮まりましたのである、御社殿は二十一年毎に新營され、その度に古式によつて御遷宮の式が擧げられるのである、外宮は衣食の神であらせらるゝ豐受大

神荒御魂を奉祀してゐるのであることは人の周く知れるところである、徳べば神路山の麓水清き五十鈴の川上に永久に鎮まります天照皇大神宮は豊受大神宮と相並んで悠久なる古代の昔から光輝ある我が國史の發展と共に上は皇室から下は衆庶萬民に至るまで國家祭祀の中心として奉養の誠を捧げられ來つたことは實に我國體の精華として仰がるゝところである、茲に高雅なる神殿前に參拜大東亞戰爭必勝を祈願した吾々一行は千古斧鉞を入れない鬱蒼たる森林に圍まれた、さながらに神の世を想はしめる森嚴なる神域を出て前につゝ歩んで雄勁にして清楚な鳥居を再びくゞつて神域を雨にぬれ視察した參宮道路を一路松阪に向つたのは丁度二十九日の午後三時頃であつた、伊勢の外宮内宮に參拜道路は近時幅員二十米突にも餘るコンクリート鋪裝の實に立派な、道路が出来てゐるが、その神域に入る第一の關門は古代から有名な宇治の大橋である、世にこれを宇治橋、大橋、裳瀧河橋とも名づけてゐるのであつてその規模は橋の前後に一丈八尺の神明造の鳥居を建て、その左右の兩側に高欄を有しその上には十六箇の擬寶珠を載せてある、而して橋の長さは三十丈幅二丈六尺五寸であると聞いたが、見れば純日本式總檜木造であるこの橋が東京の宮城から皇大神宮神域に通ずる所謂國道第一號路線に接續してゐて、その下を流れる五十鈴川の清冽と相俟つて神境に應はしい偉觀を示してゐる。この橋の濠麿については明かではないが筆者が康永元年の土佛參

詣記について見ると、この頃の大橋は現在の如く高欄擬寶珠付の立派な様式ではなかつたやうである、中世以降國費が窮乏して式年造替さへ中絶した時には自然この宇治橋の如きも朽折のまゝ久しく修造せられず、只だ特志家の勸進によつて漸く造替されたことも度々あつたやうであつたがその後天正八年に織田氏天正十九年に豊臣氏の手によつて架設を見たのである、更に江戸時代に至つては元和四年始めて之を造替して其後安政四年に至る間二十一年に互つて造替又は修葺されてゐるが明治二十年度からは造替官使應に於いて國費を以て造替することに定めたのである、元々大橋は古來から神宮の所管の如くであつたが江戸時代に至つては造營の事は總て山田奉行に於いて之を管掌してゐたやうである、もう一つ神境内五十鈴川に架する一大木橋がある、即ち授與所の前から南風日祈宮に至る參道に渡す橋であつて風宮橋と云つてゐるが、これが宇治大橋を御裳瀧河橋と云ふに對して五十鈴川橋とも稱するのである、橋の長さは十四丈四尺幅一丈五尺三寸と聞いたが構造は見たところでは全然大橋と同じである、氏經日記寛正六年の頃に始めて其の名が見えて居るからその起源も亦略は大橋と同じ頃と思はれるのである、往昔一生成に一度の念願とされその道中に幾夜の旅寢を重ねた……お伊勢まり……も現在では交通機關の發達した有難さに東京から内外兩宮を參拜しても一晝夜より時間のかゝらないにはさぞ封建時代の人々は驚くであらうと



池本 事務所長の案  
師 内で行は某  
師 事務所長の案

へ茲に平井幹事と筆者は熊本技師等に厚く好意を謝して再び車上の人となつて龜山に向つたのであつた。

再び名古屋に引返す

津市までは大體、前に視察した所謂參宮一號道路を通うたが津からは別れて鈴鹿街道に入つたのである、この鈴鹿街道も今日にては既に道路幅員は狭く所々に凸凹あつて自動車は激しい路面にも屢々遭遇したが。現下大阪から名古屋に貫通する輸送道路と併せて關係各府縣當局者に依つて計畫され既に實行に移されんとしつゝあるさうであるが例の鈴鹿の險を貫くとせばこの鈴鹿街道を擴大施工をなすのでなからうか、斯くなれば鈴鹿街道もその面目を一新して交通も次第に頻繁となり沿線は相當の發達を見反徒各所へきかと想像しつゝ途中景行天皇の御代に天下の形勢は

想像しつゝ再

び參宮道路を

走つて僅か時

餘にして津市

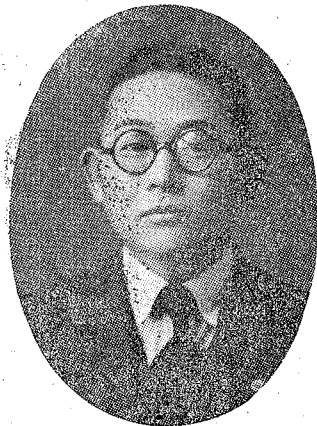
本に歸つて少し

早く早い熊本

師 事務所長の案

内で行は某

亭で夕食を了



熊本 廣大伴武日の  
師 兩氏を副將と

るに至るに起  
るに及んで、  
天皇は皇子日  
本武尊を主將  
として吉備武  
廣大伴武日の  
師 兩氏を副將と  
し東の反賊を  
征し給ふたが

尊は駿河から上總の反徒を征し、更に進んで奥羽まで遠征されたが、歸途上野信濃を巡視して最後に彼の伊吹山の賊を平定されたが、この時尊は賊より受けたる創痍が原因となつて遂に伊勢の能褒野で薨去遊ばされたと傳へられる、大日本史贊に收めてある「日本武尊傳贊に日本武尊不出世の姿を以て雄偉の略を奮ひ、一鶚巢師を誅戮し、再駕蝦狹を讎服す我が武維れ揚り、疆國寧謐征伐の功之と與に京しうするものなし」と記してある、尊の英風を仰ぎたてまつらんとこの地能褒野に尊を祭祀してある能褒野神社に參拜して隣時休憩の上再び車上の人となつて關町を通るに當つて平井雅兄に……關の小萬が龜山通ひ月に雪歌が二十五疋と歌はれる由來を聞きつゝ龜山驛についたのは盛夏の永き日も薄夜の頃であつた、こゝで待つこと間もなく名古屋行の列車に飛び乗つて途中

天下の名川揖斐長良に架せられ桑名市と長島村とに跨がる延長千百五米で昭和四年から起工して同九年に竣工しその工費百七十五萬圓を要したと云はるゝ東洋第一の人道長橋である、伊勢大橋と工費百五十六萬圓を費やして昭和五年から起工同八年に竣工した延長八百七十メートルの同道橋尾張大橋を車窓で眺めつゝ名古屋驛に着いたのは午後の十時過であつた、同驛に下車した平井氏と筆者は直ちに車を飛ばして榮町にある大一ホテルに赴き一泊することとなつた、入浴後ベットに入つて伊勢路視察の跡を顧みて第一線に立つ土木戰士の苦難を想ひ、また三重は本居宣長や、松尾芭蕉齋藤拙堂等の學者詩人を生み、また一休禪師や狩野元信や廣重のことを浮び出し又彌次喜多八が感興の旅を續け更に關の小萬、油屋おこん、やからの平治、三十三間堂のお柳等々の傳話を聞いたのを思出して哀調の旅愁を唆り、またあの桑名の殿様の古調を思ひ出して紫煙を徒らに吹かしつゝ、伊勢の思ひに時の移るを知らず深更に及んで漸く眠りにつくを得たのであつた。

### 河和の工事を見る

名古屋の大一ホテルで一夜を明かした平井幹事と筆者は朝食がすむと早速平井幹事は本會の用向で愛知縣廳を訪ふたので筆者も同道して氏が吉田道路課長と用談中漸次待つた後ら再び内務省名古屋土木出張所に赴いたが丁度富永所長が出動して居られたので平井幹事と筆者は所長室で……來名した挨拶と目的を述べて併せ

て平井幹事から所長が用務を帯びて上京の留守中に種々御厄介になつた禮を述べたところ温厚なる富永所長は終始微笑を以て……この炎暑に御苦勞……と吾々を先づ暢らつてくれて……今夜ゆつくり話合ふから丁度十二時だからこゝで辨當を食つて今日は一つ河和の工事事務所に行つて庄司君のやつて居る仕事を見て來給へと實に隔意なく話されたので、そこで平井幹事と筆者は所長の好意に甘へて中食を供せられた上、出井屬の案内によつて早速河和工事事務所を訪問することにして三人は省線熱田驛前を起點とする武豊電鐵に乗り知多半島中部東岸にある同半島に於ける商工業の中心地である半田市を経て河和に向つたのである、こゝに到着したのは午後一時を過ぎてゐたが茲にも又名古屋の土木出張所から電話をしてくれてあつて庄司工事事務所長の命を受けて運轉手が車をもつて河和驛まで迎へに来て居たのは恐縮したのであつた、吾々三人は直ちにその車に乗つて先づ工事事務所に所長庄司陸太郎氏を訪ひて挨拶を取りかはした後ら、庄司所長の案内に依つて規模廣大なる○○工事を見たのであるが、この工事は先きに見た池本技師の擔當せる「前號記載」○○工事とは其の趣きを多少異にして海岸に於ける○○場や丘陵を切り開いて道路建設は勿論、○○建築に要する敷地工事や其他種々の土木事業が含まれて居る、これに従事して居る○○○人の人々は全く克く熱心に働いてゐる、殊にこの工事は直接現下苛烈なる決戦に關係を持つと

ころの〇〇の仕事であるから庄司所長以下木工に至るまで非常なる緊張を以て前線將兵の魂をその儘に土木戰に打込んで酷熱下に於いて早朝から日暮まで丘陵の切り開きに或ひは道路建設の設計や地均らしに、又は〇〇場所のコンクリートの鋪裝工事に滴たる熱汗を拭きもせず働いて居ることは全く土木戰士と云ふ名に背かないと思ふたのである。聞けばこの大規模の工事が全部竣工の

際には河和は一大〇〇地と化するものであるが、これまで武豊驛から河和を経て南約二十一杆のところにある知多半島の東南端にある一港町で古くから漁港として賑はつた人口約五千七百を擁する師崎町との道路連絡は餘程迂廻せんと不可能になるとのことであるが、この問題については〇〇當局者も亦庄司所長も〇〇の背地を成るべく直線に道路を敷設して愛知縣下で屈指の水産額を擧げる師崎漁港の將來を深く考慮して居るやうである。最も同港は陸上に於ける道路は唯一の交通のみならず海上交通輸送は頗る便利であると思はるゝから多少の迂廻は左程同町の發展に影響するものでなく殊に〇〇の建設は決戰體制下に於いて〇〇が必要缺ぐべからざる重要工事たるに鑑みれば一漁港の陸上交通道路の多少の迂廻などは問題にならないのは勿論、却つて河和の〇〇工事が全部竣工した上は師崎からの需給關係に於いて將來の發展性があるのでないかと思ふたのである。河和の土木事業は時局の關係上大體この位に止めて置いて庄司所長の深甚なる好意によつてこ

ゝの大工事の概要を聞きまた現場を一巡した吾々は所長にわざわざ河和驛まで送られて再び武豊電鐵車上の人となつて名古屋に歸つたのは丁度午後の六時頃であつた。

#### 富水所長等と語る

名古屋に着いた吾々は富水所長から〇〇亭に招待されたのであるが聞けば所長は吾々のために一席設けてくれたとのことである又々恐縮するより外になかつたのである。平井幹事と筆者は相談の上固辭するのも禮に非ずと吾々に都合のよい理由を考へて案内されて〇〇亭に赴いたのであるが、既に富水所長始め三池瀧川兩部長外二十餘名の諸氏が先着して待つて居て、早速設けの席に着いて丁寧なる晩餐の饗應を受けたのであるが席上所長は庶務課長富田金四郎君が本日突然高等官に昇進されたので偶然吾々の歡迎と氏の昇進祝賀とを兼ねることになつたと云はれたのは吾々は衷心より目出度い意義ある一席であると思ふたのである。筆者は席上富水所長に土木に對する所見を求めたら。

私は土木事業……土木技術と云ふことは我田引水論か、偕て措いて、平時戦時を問はず一國の興廢に係かる重大のことであると思ふてゐる。即ち治水港灣道路其他種々の土木事業はこれの施設宜しきを得ば一國の産業の發達に寄與するところ大なるのみではなく社會文化の向上にも至大の關係を持つて居る。と所長は饒々土木行政……土木技術……土木事業等と國家との關

係について話されたあとに次いで。

昔の武將の如きも築城は勿論道路治水灌溉等土木事業に種々心を寄せ亦自らこれを行つたが、戦時に於ても土木事業と云ふことは直接間接を問はず至大の關係を持つて居る、即ち一例を擧ぐると最近では前線地は勿論内地でも各地に飛行場、飛行基地等の建設が非常に増加しつゝある。この仕事も亦畢竟土木の範圍に屬するのであつて更に軍用道路や戦力増強に對應する各種工場の建設並に水管等の保護の治水事業等其他種々土木事業は戦時に關係を持つのである。

と、決戦體制下の土木事業及び従業者の觀念について敬服に値する所論があつて最後に。

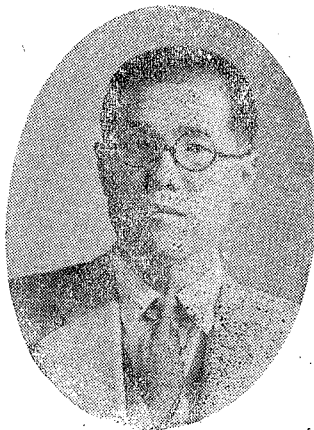
現に吾々の名古屋土木出張所の管轄範圍だけでも河川は八ヶ所其他道路港灣等非常に國家にとつては重大必要なる仕事である。東海道の重要道路の如きは直接運輸交通に至大の影響あり、また河川の改修治水は食糧の増産、水力電氣の發達等考ふれば考へる程責任も重いが、また此の重大時局下に缺くべからざる必要の土木事業であると思つてゐる、要は人的物的資源の足りない現在を克く考慮してこれを決戦體制に對應して以て緩急宜しきを得て善處せねばならんと考へるのである。

とこゝまで話が進んだが、大分時間も経過したので富永所長の所見を聞くのはこの位にしては如何かと他から注意もあつたので今

度は無遠慮に御馳走を頂戴しながら出席の諸君と種々雑談を隔意なく交へて時の經つのも忘れ勝ちであつた。フト時計を見れば指針は既に九時を廻つてゐたので平井幹事と筆者は富永所長を始め一同に懇々と好意を謝して名古屋驛まで車で見送られて、翌日豊川の工事事務所を訪ふべく午後九時二十分の發車で同驛を出發して眞夜中近くに御油驛に着き渥美半島を臨む勝景地である御油海岸の馬引野旅館に投じたのであつた。

### 豊橋市と築港

こゝに一泊したる平井幹事と筆者は早朝旅館樓上の窓を開けて眺むれば渥美灣を隔て渥美半島は遙かこなたに墨繪のやうに浮び



上り其の方向から昇る盛夏の太陽は陸上と海面の差別なく強烈な光を下界に投げてる、午前七時朝食を了へて間もなく

諸井豊川工事事務所長の好意によつて迎への車をよこしてくれたのでこれ幸と乗車してこの旅館から日本里程にして約二十丁餘驛

橋市の稍々はすれにある豊川工事事務所に赴いたのである。先づ所長の事務室に案内されてこゝで諸井所長と初対面の挨拶を交はしてから視察の順序等を定めたのであるが恐縮にも諸井所長自から案内役になつて呉れて午前十時頃先づ豊橋市と目下計畫中の豊橋港の築港状況を見たが、この市は愛知縣の東南部豊川の下流南岸にあつて中世は今橋と稱し大永の頃から吉田と呼ばれた七萬石の城下として東海道五十三次では股賑を極めた主要な宿場であつた。例の俗語に……吉田通れば二階から招くまでも鹿子の振り

袖で……と人口に膾炙されたところである。明治二年に豊橋市と改稱せられて、昭和七年周邊の町村を合併して其の人口は一躍十四萬餘に及び東西約十四軒南北約十五軒となり渥美灣に面する臨海都市となつたのである。交通は東海道線は市の中央部を東南から北西に走り名鐵線渥美線及び二俣線と更に這般國鐵に移管された南信への交通線である豊川、三河、三信田口の電鐵は何れもこの市を中心として四通八達してゐる、最近では従來同市が生命とする蠶糸業は國策の線に副つて統合整備されて工場の如きも僅かに残存するに過ぎない状態であるから戦時工業への轉換を企圖しつゝあることは見受けらるゝが、現に市の北部に當つて〇〇の大工廠又は南部に〇〇隊の施設を見て一層活氣づいてゐる、市内の主要道路は舗装をなして幅員も所によつては狹隘な箇所があるが大體この市に相等しく出來てゐる、殊に〇〇工廠に至る専用道路

の如きは大都會の主要道路に劣らぬ立派なるものが敷設されて居て物資の運搬又は人員の交通に何等支障を來たさない状態である。豊橋港についてはこの邊りからが築港計畫範圍であると諸井所長に一應の説明を受けたが神野新田先に小規模の小港の修築施工をしてゐる外に未だ具體的には何等の施工も始まつて居らないやうである。これは近き將來の問題であると思はるゝが、長根同市土木課長が云つて居るところを借用して見ると。

信州遠州と言ふ廣大なる後方地域を持つてゐる豊橋港とは如何なる規模のものか、人口十四萬餘を抱擁し、かゝる廣大なる後方地域をもち、取扱貨物百萬噸を處理する港は果して何處にありやとは變な話であるが、此處だとはつきり其の中心を指摘する所のないのを市民の一人として此の上もなく寂しい、然しかゝるあるかなしの港でさへ船舶輸送により豊橋市に集散する一ケ年の貨物量は昭和八年に於て約六十萬噸もあつて鐵道によつて集散する量は二十五萬八千噸弱であつて船舶輸送による半量にも追付かない、かくの如くこれは船舶輸送の至便さを雄辯に物語つてゐる其處で豊橋港とは市の北部を繞流してゐる豊川の船町河岸を始め此の上流に接續して關屋河岸及び對岸の下地河岸等を荷役場とする豊川河港及び市の南西隅に古い歴史を持つた牟呂港干拓地たる神野新田先に工を進めてゐる修築港等を引括るめてさやうに稱へ昭和十一年新に指定港灣に編入された



のである。云々。

とあつて結論として大東亞戰爭の特性から日本海方面より太平洋方面への物資輸送上、中部に於ける交通路四鐵道の起點豊橋港は國防上重大なる役割を持つからと云つて市民は近代港たるべき施設に向つて眞剣に一心協力すべき秋であると述べ居るがこれを見ても豊橋港の問題はまだ、將來に屬する問題である地理的條件に於いても將來大東亞の共榮圈が漸次確立して行くに従ひ東京大阪横濱神戸の各港中間に廣大なる背後地帯を擁する豊橋港の如きは相當の擴張して近代港として諸施設を完備することは必要であらうと思はれるのであつた。約一時間餘を費やして豊橋市と港を一巡した諸井所長と吾々は序いでに豊橋市から北方約一程にある圓福山と號して嘉言元年東海義易の開基に係り、本尊吒枳尼天は開運施福の靈驗あらたかであると云ふので、全国的に多數の信者を持つ豊川稻荷と呼べる、好嚴寺に詣で正午頃一先づ豊川の工事事務所に戻つて茲で中食の馳走を受けたのであつた。

### 豊橋から濱松まで

食後諸井技師と共に吾々は再び車を走らせて東海道の一號國道の視察に出かけたが、豊橋市の市内國道は幅員狭少迂曲甚しく都市計畫は道路幅員〇〇米乃至〇〇米二川町は〇〇米で其他の路面幅員は〇米とのことであるが、本年度から明年度にかけて施行する道路は愛知縣側は約八千七百五十一米で靜岡縣側は約九千九百

米餘であるこのことであるが、この内には昭和十九年以降に及ぶ箇所もあると車上に聞いたが、所々既に出來上つてゐる。新道を通過して遠州濱名郡の最西端にある東海道の一驛、人口約四千餘の白須賀町を経て潮見坂に出たのであるが、嘗て平井幹事の書いた「一號國道視察自動車旅行案内記」に……之が古來有名な潮見坂で古松落々として南は遠州灘渺々漫漫太平洋に連り、雲か浪か天を浸し其壯觀響へ難く眺望の潤大を以て稱せられる、林羅山は「天地豈識幾層潤、舒卷古人方寸端、滿月不遮潮見坂、大鶴飛盡水漫漫」と詠じたものである。明治元年聖上東幸の際鳳輦を駐め給ひ此偉觀を賞せられたる聖蹟である」とあるが誠に其の通りであつて、こゝの景勝には最早や駄筆を加へる必要はない、氏の書いたので盡きてゐる、この險坂を土工は或は山を削り或はトローで土塊を運び酷熱下に太陽の灼熱を浴びて所々新道の敷設に働いて居る、舊國道は多少迂曲があるが新道は幅員も廣くしてこれを稍々直線につけ替へて居るこれが全部出來上つたならば餘程勾配も緩和されて自動車運輸上至大の便を得ることであらうと思はれたのであるが、兎も角この工事を車上で視察して史蹟名勝天然記念物保存法によつて大正九年に史蹟として指定せられてある荒井關址の前を通ふて濱名湖に架設したある西濱名橋と中濱名橋とを通過してこれも往昔東海道五十三次の宿場であつた舞坂町に入つたが、聞くとこの二橋は靜岡縣營で大正十五年起工して漸く昭和

七年の八月に竣工した縣下五大橋の一つであるとのことであるが、兩橋の全長は六百七十五米餘、有效幅員は西濱名橋は〇〇米、中濱名橋は少しく狭くて〇〇米、であつて鋪裝は西濱名橋はアスファルトブロック中濱名橋はシートアスファルトで取合道路、延長二・三三三軒有效幅員〇〇米で此の工事費は八十八萬餘圓であつたとのことである。舞坂を経て吾々は砂利敷きの幅員約〇〇米あると思はれる所謂東海道の一號國道を視察しつゝ濱松市に入つたのは午後二時頃であつた、濱松市は遠州電鐵と濱松鐵道の接續地として靜岡縣の西南部、天龍川と濱名湖の中間にある工業都市である、市街は隆起洪積臺地三方ヶ原と遠州灘の後退による海岸低地と天龍川の堆積作用に因る沖積低地の兩地相に跨つて居るから自然道路も險しくないが坂道が澤山ある、市街道路の鋪裝は大牛出來て居るが二三道を除くの外幅員狭く市内には電車なくして市營の乗合自動車を唯一の交通機關としてゐる、道路の狹隘のために行き歸りの車體をかはずのに困難なる箇所が所々ある、併乍ら省線濱松驛の附近は道路も完備して居る此地は永徳年間に徳川家康が岡崎から遷つて居城となつたところである。吾々一行はこの市を經由して市から北西約二里の地點にある三方原臺地の一端を通ふて姫街道に入つたのであるが、此三方ヶ原は元龜三年十二月武田信玄と徳川家康の兩軍が合戦して家康が大敗したところの古戰場である、姫街道は現在指定府縣道になつてゐるが丁度濱松

から濱名湖の裏面を通ふて御油に出る往昔の所謂影街道である。

#### 姫街道の由來と視察

斯様に裏街道又は影街道と云へば今日果してかゝる道路は何所にありやその意味は理解出來ぬかも知れぬが、この名稱は幕府時代に呼ばれたものであつて、幕府はその自衛上の必要から公道の要路殊に江戸を中心として關東に出入する公道の上には大小共に關所を設けて通行を檢制したものであつた、即ち河段、李の橋、碓氷、横川、五料、市川、松戸、岡宿、栗橋、箱根、根府川、小佛、小岩、新口、大戸、屯木、杉戸、中田は何れも關東の要地として徳川幕府が直轄で關所を設置し、其他に前記した遠江の荒井、氣賀、信州の勢田路、木曾、福島、浪合、帶川、江州の山中、築瀬等の如き關東以外にも關所を設けて何れも其の地の領主或は代官に命じて通行人を嚴重に警戒せしめ、殊に主として武士及び婦女の通行を取締つたものである。然るに幕府は後世泰平に馴れると漸次警戒も寛やかになつて從て處に依つては自ら裏道の密行をも默許するに至つたのである、併乍ら東海道に於ける箱根及び荒井の關所の如きは要道中の最要關なるを以て年と共に愈々嚴重になつたから茲に所謂姫街道または裏街道と云つて、當時大名の家族や武士婦女子等は面倒なる荒井の關所を避けてこの默認道路を通つたものである。現在の姫街道は往昔の道路とは多少路線が違つてゐるが大體同じであつた、只だ幅員が幕府時代は餘程狹隘で

あり漸く二人の籠擔ひが通れる位のところ各所にあつたのである。吾々はこの姫街道を自動車で氣賀、三ヶ日の兩町を経て本坂峠と云ふ稍々險阻の坂道を突發して再び豊川を經由して豊橋市に歸つたが、道は比較的平坦であり左程凹凸もなく幅員こそ狭いが東海道の幹線を走つて居る愉快さとなつた變りもなかつた、この街道の要衝に當る所謂昔の抜け街道の宿場であつた氣賀は現在でも靜岡縣西南部濱名湖の東北岸にある引佐郡第二の町で米と蠶糸の産出地として知られてゐるが同じく宿場であつた三ヶ日町は濱名湖北部の支湖猪の鼻湖に面して三州街道とこの姫街道の交點にある引佐郡第一の都邑で地方物資の集散地である。往昔各街道にあつた人足又は雲助と呼ぶ人夫共はこの姫街道にもあつたが、殊にこの舊街道では通行人を脅かして酒錢を貪り或は婦女を拐帶するなど多かつたので警察權の不完全なる世であつたから各自が警戒するより外に安全の道が少ないので氣賀や三ヶ日の宿場には旅客は日のある内に到着して大變賑はつたことである。

この姫街道を視察して豊川工事事務所に歸つた諸井所長と平井幹事と筆者は同事務所で暫時休憩して所長を中心に種々視察談や雜談を試みて午後七時頃厚く好意を謝して再び御油海岸の馬引野旅館に歸つて一夜の勞を休めたのであるが翌三十日に平井幹事は御油驛から乗車して歸東せられ、筆者は所用のために數日遅れて歸京する豫定を以て岐阜から大阪に向かつて東京に歸つたのは九月

の五日であつた。偕て今度の視察で吾々の深く感じたことは土木の第一線に居る人々が眞に現下の超非常時局……決戦體制を克く認識理解されて酷暑の如きはものともせず上は所長から下は工夫土工に至るまで一致團結協心以て所謂土木魂を發揮してゐることである。この職域奉公に渾身の努力を捧げて居ることを目の邊り見てこの意氣精神が畢竟大和魂であり其の魂が敵米英に勝てるのであると痛感したのである。若し夫れ専門の技術的なることに至つては門外漢である筆者克くするところに非らず従つて筆者の視察記は専門的には書けざるところを諒とせられたい。最後に富永所長外各位の御歡待を深謝すると共に爲邦家益々御奮闘と御健康を祈つて茲に拙筆を擱くことにする。(此稿終り)

